

1. 教育の責任

成人看護の対象者は、青年期から向老期に至る様々な方である。成人期の対象者の健康とは、生活や環境と切り離して考えることのできないものであり、個人の生きることの意味に深くかかわるものととらえることができる。成人看護学では、そのような対象と関わるため幅広い知識や技術を持つだけでなく、対象者のより良い生活を送るための関りを常に考え続ける必要がある。加えて、対象者の国籍や価値観、ニーズも様々であり、多様であることも認め合い、感性を高めて関わり続けていく必要がある。

そのためにも STUDY FOR LIFE の精神に基づき、国際看護学部の特色である、「学士力」「実践力」「国際力」を持ち合わせられるような学生の育成を目指す。

2. 教育の理念

STUDY FOR LIFE の精神に基づき、国際看護学部の特色である、「学士力」「実践力」「国際力」を持ち合わせた学生を育成する。

3. 教育の方法

急性期看護援助論 I では、様々な手術を受ける周術期における対象者の身体的・精神的・社会的側面を捉えて、全人的に捉えながら、その対象者の手術前後の変化や、退院後の生活を踏まえた看護を学ぶ。学生は同世代以外の方と触れ合う機会が少ないことから、世代が違う対象者をイメージすることが難しい。そのため、具体的な事例や実践的なデモンストレーションを用いながら、対象者の理解を促す工夫を行う。また教員からの問いかけやグループディスカッションなどを行いながら、常に考え続ける姿勢を尊重した双方向的な関わりを実施する。

急性期看護援助論 II では、急性期看護援助論 I を踏まえて、事例を用いた看護展開を実施する。具体事例を用いた展開を行うことで、より実践に近く、具体的に思考が展開するように関わる。また演習やグループディスカッションを取り入れ、学生自ら考えて行動ができるような工夫を行う。

急性期看護学実習、急性期看護援助論 I や急性期看護援助論 II を基に、実際に手術を受ける対象者に看護実践を行う。急性期看護であり、手術を受ける前後で起こり得る身体・精神・社会的変化を捉えて、対象者を尊重した看護が行えるように支援する。また実践した看護が、学生の中で意味づけられるように、学生が感じたことや疑問・違和感等を尊重して関わっていく。

すべてを通して、学生が主体的に学びをすすめられるように、学生を認め尊重する姿勢で接していく。

4. 教育の成果

講義後アンケートや実習後の発言から、急性期看護（特に周術期）における対象者の状況が刻々と変化する中で、予測して動くことの大切さを学んだ、また全人的に見ようと思っただけでもいづれかの側面に偏っていることに気づいたなどが述べられていた。

また同領域の教員から、講義や実習に対するフィードバックを適宜いただくと同時にディスカッションを行い、次に繋げられるように精錬していった。

5. 改善への努力と今後の目標

講義や実習後の振り返りを、教員間で適宜行いながら追加修正を実施する。また教員間だけでなく、学生からの意見を講義後アンケートや発言から抽出して、さらなる追加修正に努めていく。今後は客観的な評価指標を検討し、教育効果を計りながら改善に努めていく必要がある。

【添付資料】

シラバス

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：国際看護学部 名前：河野 孝典 作成日：2023年12月25日

講義資料

リアクションペーパー

講義後アンケート

学生からの意見

教員間のフィードバック、ディスカッション